

## 主宰企画①

### 酪農学園大学附属動物医療センター生産動物分野での仕事 —現状・これからの展望—

○秋吉 珠早、山下 和人  
酪農学園大学附属動物医療センター

動物看護師統一認定機構による動物看護師統一認定試験も本年3月に4回目が終了し、小動物病院では認定動物看護師が増えてきている中、私は国内初の生産動物看護師の一人として酪農学園大学附属動物医療センターで一步を踏み出し、約1年間が経過した。日本では、生産動物看護師の仕事内容は確立されておらず、当センターにおいても未だ模索中である。今回、生産動物医療分野動物看護師として1年間働いた私自身の経験から現状や今後の展望について紹介したい。

#### 【生産動物看護師の現状と問題点】

生産動物医療分野では土・日・祝日も関係なく往診と外科の当番があり、365日診療対応が求められている。私の当センターにおける仕事は、管理業務と繁殖科業務の大きく2つに分かれる。管理業務は、伴侶動物医療分野と同様に、入院動物や実習用提供動物を繋留する牛舎の稼働状況の管理、薬品以外の消耗品の管理、手術補助、カルテ管理などの診療補助である。繁殖科業務には、家畜人工授精(AI)と繁殖検診などである。また、昨年度後期より本学附属農場での定期的な削蹄にも参加し、蹄病予防の分野にも仕事内容を広げている。

私と同じく昨年度採用された北海道農業共済組合(北海道 NOSAI)の生産動物看護師と大きく異なる点は、AIの実施件数が明らかに少ないことである。当センターでは、もともと NOSAI に比べて診療件数が少なく、AIを担当する農家戸数も少ないため、数少ない経験の中でいかに技術レベルを上げ良好な受胎率を維持するかが、現在の私の大きな課題となっている。そのため、大学ならではの「実習牛を使った日々の鍛錬」、「繁殖検診に同行し、個体ごとの繁殖機能状態の経過の把握」など牛も自分もベストな状態での AI を心がけている。

私は AI 等で往診に出かけることもあるが、業務の中心は事務室での事務作業(管理業務)となっている。当センターでは、常に大勢の獣医学生が待機しており十分な人手が確保されていること、牛の受精卵の需要増に伴って体外受精のための経腔採卵(OPU)件数が増加しているが繁殖科では体外受精の施設・管理者の不足から循環農学類の教授にその一連作業を委託している現状にあること等が、私の仕事として管理業務の割合が多くなる要因となっていると考えられる。

#### 【生産動物看護師の展望】

生産動物看護師にとって、家畜人工授精師の資格は最低条件であると考ええる。そもそも動物看護師が国家資格化されるためには生産動物分野の職域確保が必要不可欠であり、その第一歩として家畜人工授精業務を認定動物看護師の資格で実施できる制度を作るべきだと私は思う。そのためにはコアカリキュラムで生産動物関連の講義や実習を充実させることが必要である。

また、大学附属施設である動物医療センターでは、動物看護師が獣医療に携わるプロとしての自覚を持ち、学生のチューターとして「教育」に関わることが今後の姿であると考ええる。私は、生産動物看護師として学生教育に関わっていくため、2級削蹄師の資格取得(今年度チャレンジする)、血液・乳汁検査等の技術の習得、さらには OPU にも関係する受精卵移植師や胚培養士の資格を取得し、対応できる診療業務の幅を広げる必要があると考えている。私は、動物看護師の職域が少しでも広がるように、常に新たな可能性へとチャレンジしていきたい。